鳥大農研報 (Bull. Fac. Agric., Tottori. Univ.) 36 136～144 (1984)

鳥取県香取農家の経営と生活 (II)

田中 浩*・福士俊一*

昭和58年7月30日受付

Farming and the Life of the Katori Settled Farmers in Tottori Prefecture (II)

Hiroshi TANAKA* and Shun-ichi FUKUSHI*

Surveys have been made seven times during the last 24 years from 1957 to 1981 in the Katori settled area. In this paper we describe the development of farming and the life of the Katori settled farmers, comparing the survey results of 1981 with those of 1977. In 1977, the farmers had established dairy farming and, this developed steadily in the following 4 years. The average number of family members of the farm households amounted to 4.91, and 73 percent of the farm households had a young couple or successors who engaged in farming. The planted area of feed and forage crops amounted to 717 ares. The average number of livestock per farm was 33 dairy cattle, 12 beef cattle and 3 hogs for breeding. The farm labour hours per day of male workers was 10 hours 43 minutes and for females it was 7 hours 46 minutes. The dairy working hours were longer in the individual farms than in the joint-holding farms. Each of the settlers showed a much greater intake of nutrients and foodstuffs than the national average for farmers.

緒　　言

「入植35周年を記念する今日この日から，わが香取は香取村になる。

開拓はもとより「村造り」の仕事そのものであった。今日その本来の姿に返るのである。今日この日より，われわれはかりそめの開拓団員から百・千年の命を目ざす「香取村」人として歩み始めたのである。(中略)

35年の辛惨な月日を経て，今日われわれは「村造り」の基礎工事を漸く終った，と告げてよい。われわれは道の曲り角に来たのである。……」(香取村宣言より)

昭和21年に鳥取県大山原野に入植した香取開拓農民は，56年11月11日入植35周年を記念して香取村の宣言を行って牛飼いの村香取100年への新たな歩みを開始した。

しかしながら，新生香取村の前途は必ずしも楽観できない現状にある。入植当初の香取は営農と生活の基盤作りに取り組みながら自給農業をめざし，30年代には換金作物中心の畑作経営から主酪経営を経て酪農経営へと転換し，40年代に酪農経営の基盤作りを終え，更に50年代には土地基盤整備を行って自給飼料の生産体制を整えるなど順調な発展を遂げていた矢先，54年に実施された牛乳の生産調整によって香取では搾乳牛飼養頭数の凍結を行うこととなり，一部の零細農家では脱農せざるをえなくなってきた。加えて，開拓の基礎作りにあたった一世の大半が，高齢期を迎えたために労働力の再編にせまられていること，また，開拓地区内に45戸が定住している

* 鳥取大学農学部農業経営学科農業労働科学研究室
Department of Farm Economics, Faculty of Agriculture, Tottori University

ものの脱農家が現れているなかで，最低100戸は必要とされる「むら」作りをどの様に進めていくのか，など多くの課題を抱えている。

著者らは昭和31年に第1回の調査を実施し,[1] 引き続き4年ごとに調査を実施して主酪経営の営農と生活について検討を行い,[2,3] 更に酪農経営への転換と発展について分析を行ってきたが,[4,5,6] 本報告では規模拡大が凍結されている56年の営農と生活について，52年の調査結果と対比しながら考察を試みた。

調　査　方　法

1．調査対象

鳥取県西伯郡大山町香取開拓地の農家35戸のうち家畜飼養農家33戸を対象とした。

2．調査期間

昭和56年の調査期間は9月2～4日の3日間，52年は8月31日～9月2日の3日間である。

3．調査方法

調査方法は留置法と面接聴取法を併用し，農業経営及びその意識調査（経営主記入），生活時間調査（農作業従事者全員記入），献立調査及び食生活に関する意識調査（調理担当者記入），農業及び生活に関する意識調査（全員記入）を実施した。

調査結果とその考察

1．調査農家の概況

(1)　調査農家の推移

香取開拓農家は昭和21年に100戸が954haの大山原野に入植し，その後漸増して27年には126戸に達したものの，営農不振に伴う離農家が続出した。著者らが第1回の調査を実施した32年には56戸，36年には43戸，40年には45戸となり，その後は45戸が定住しているものの若干の脱農家があり，44年40戸，48年41戸，52年39戸，56年35戸が農業を営んでいる。56年の35戸を経営組織別にみると，酪農個別経営19戸，酪農協業経営10戸，酪農・養豚協業経営1戸，肉用牛（和牛）育成経営1戸，養豚経営2戸，養蚕経営1戸，地区外通勤酪農経営1戸となっている。本報告の対象農家は養蚕及び通勤酪農農家を除く33戸である。

ここで，酪農個別経営農家20戸（酪農・養豚協業経営を含む）について，52年から56年にかけての飼養規模の推移をみると次のようになる。前報[6]で指摘したごとく，48年から52年にかけて10～15頭飼養規模農家の消滅と6戸の協業経営移行がみられたが，52年から56年にかけて零細規模農家の経営後退，15～19頭規模農家の減少，30頭以上の飼養農家の増加が指摘される。すなわち，52年における1～4頭規模農家2戸のうち1戸は，56年では養豚経営に転換し，1戸は労働力構成の不備もあって脱農している。5～9頭規模農家3戸のうち1戸は15～19頭規模に発展し，1戸は現状維持，1戸は1～4頭規模に後退している。15～19頭規模農家7戸のうち4戸が20～29頭規模に，1戸が30頭以上の規模に発展，1戸が現状維持，1戸が脱農している。20～29頭規模農家4戸のうち2戸は30頭以上規模に，1戸が現状維持，1戸が15～19頭規模に後退している。30頭以上規模農家6戸はいずれも現状を維持し若干の飼養頭数を増加させている。

このように，56年では小規模飼養農家にあっては牛乳生産調整に伴う飼養頭数凍結による影響が大きく営農不振に苦しんでいる反面，15戸の農家では凍結以前の実績により一応多頭化を達成しているとみてよい。

(2)　協業経営組織の概況

香取開拓地の協業経営は酪農を主体とした2農事組合法人が40年代に設立されていたが，50年代に入って新たに2法人が設立された。

最初に設立された大三井協業は親類関係にあった4戸の農家によって44年に設立された。発足当初は搾乳部門に3組の若夫婦，育成及び肥育部門各1夫婦（搾乳部門を兼担），養豚部門に老夫婦2組（うち男性1人は香取農協組合長）を配置していたが，56年には老夫婦が高齢となったため養豚部門を廃止した。56年の構成員は男性5人（場長兼酪農1，酪農1，肥育1，草地1，畜舎管理1），女性7人（協業畜舎の掃除・給じ3，肥育1，育成牛管理3），飼養家畜は搾乳牛85頭，育成牛20頭，肉用牛（乳用種）肥育120頭である。

次いで，48年に6戸の農事研究グループ農家によってつばぬき共同牧場が設立された。発足当初の構成は男性8人（うち1人は香取農協専従），女性6人であったが，56年には男性が1人減少して6人で実務を担当している。男性の担当部門は場長1，搾乳2，畜舎管理1，育成1，草地1となっているが，朝夕の搾乳作業は4人，給じ作業は2人で行っている。56年の飼養頭数は搾乳牛185頭，育成牛62頭である。

第3の協業組織は家族内協業として兵郷畜産が52年に発足した。対象農家は以前から酪農・養豚複合経営を行っていたが，子弟の成長を待って農事組合法人化したもので，長男夫婦が酪農部門，次男夫婦が養豚部門，経営主夫婦が協業経理と補助的労働に従事している。56年の家畜飼養頭数は搾乳牛35頭，育成牛5頭，子取り用豚め

す35頭，おす3頭，育成豚5頭で，年間肥育豚600頭を出荷している。

更に，大山町香取肥育センターが53年度肉牛肥育施設近代化促進事業により5戸の協業組織として発足した。400m²の畜舎（32パドック設置）に約250頭の肉用牛（乳用種）を1年間肥育し出荷している。56年の肥育頭数は240頭であり，自家配合飼料で飼育し，パドックはおがくず床とし5日で交換している。56年における肥育センターの管理は構成農家の後継者夫婦2人と雇用者2人で行っている。勤務時間は8～17時であるが，肥育牛出荷日には早期勤務や残業を課している。

(3)　家族構成と農業従事者

調査農家33戸の世帯員を経営組織別・飼養規模別に第1表に示した。

56年の世帯員は1戸当たり平均4.91人，うち男性2.55人，女性2.36人で男性が若干多い。これを52年の世帯員と比べると0.31人の増加となり，男女別では男性が0.21人，女性が0.10人の増加を示している。年齢別にみると，男性では15才以下の階層が0.64人(25%)，16～59才が1.39人（55%），60才以上は0.52人（20%）となり，女性では同じく0.67人（28%），1.36人（58%），0.33人（14%）となり男性の高齢化がみられる。52年と比較すれば，15才以下の男性0.10人，女性0.19人の増加となり，これは開拓三世が着実に増加していることを示している。これに対して16～59才の基幹労働力は男性0.01人の減少，女性も0.16人減少する一方で，60才以上の高齢者が男性0.12人，女性0.07人の増加をみせている。したがって，香取では農家の半数に男性の高齢者がおり，3分の1の農家に女性の高齢者がいることになり，入植35年の段階で経営主体が開拓一世から二世へと移行しつつあることを示し，高齢化に伴う労働力の質的低下に対処する具体的な方策が望まれるところである。

これらの傾向を経営組織別にみると，酪農個別経営では，5～9頭規模層の男性基幹労働力が欠如している。20～29頭規模層では男性世帯員が52年に比べて0.95人減少して1.80人となり，15才以下では0.55人減少して0.20人に，16～59才の基幹労働力も0.30人減少して1.20人となっている。前述の如くこの階層農家の4戸は52年の15～19頭規模から56年に20～29頭規模となり，残る1戸は現状維持農家であって，5戸の平均飼養頭数も21.6頭にとどまっているなど経営・労働の両面で低滞がみられる。

30頭以上の農家は56年に10戸となり，個別農家の半数を占めるに至ったが，基幹労働力の減少が著しく，男性

第1表　経営組織，飼養規模，男女別世帯員　　（1戸当たり平均数）

経営組織	飼養規模	52年 戸数	52年 平均飼養数	52年 世帯員計	56年 戸数	56年 平均飼養数	56年 世帯員計	男 小計	男 15才以下	男 16～59	男 60才以上	女 小計	女 15才以下	女 16～59	女 60才以上
	頭	戸	頭	人	戸	頭	人	人	人	人	人	人	人	人	人
酪農個別	1～4	2	3.0	2.00	1	4.0	4.00	3.00	1.00	1.00	1.00	1.00	0	1.00	0
	5～9	3	7.0	3.00	1	5.0	2.00	1.00	0	0	1.00	1.00	0	1.00	0
	15～19	7	16.9	4.42	3	17.3	4.66	2.33	0.67	1.33	0.33	2.33	0.67	1.33	0.33
	20～29	4	25.8	6.00	5	21.6	5.00	1.80	0.20	1.20	0.40	3.20	1.40	1.40	0.40
	30～	6	35.2	6.50	10	36.3	6.40	3.40	0.80	1.80	0.80	3.00	0.90	1.60	0.50
	小計	22	20.9	4.86	20	26.6	5.45	2.70	0.60	1.45	0.65	2.75	0.90	1.45	0.40
酪農協業	大三井	4	67	5.00	4	85	6.00	3.25	1.50	1.25	0.50	2.75	1.00	1.25	0.50
	つばぬき	6	181	4.17	6	185	3.51	2.17	0.67	1.50	0	1.34	0	1.17	0.17
	小計	10	248	4.50	10	270	4.50	2.60	1.00	1.40	0.20	1.90	0.40	1.20	0.30
育成	———	2	16.5	2.50	1	11.0	4.00	1.00	0	0	1.00	3.00	1.00	2.00	0
養豚	———	1	50.0	4.00	2	22.0	2.00	1.50	0	1.00	0.50	0.50	0	0.50	0
合計	———	35	20.2	4.60	33	24.3	4.91	2.55	0.64	1.39	0.52	2.36	0.67	1.36	0.33

（注1）酪農協業の飼養数は総数を示し，合計の飼養数は搾乳牛の平均を示す。

第２表　世帯構成（経営組織，個別規模別）

（単位：戸）

区分	年次	個別規模別 計	4頭以下	5～9	15～19	20～29	30頭以上	協業 計	大三井	つばぬき	育成	養豚	合計
総数	52	22	2	3	7	4	6	10	4	6	2	1	35
	56	20	1	1	3	5	10	10	4	6	1	2	33
2夫婦	52	11	0	0	2	4	5	4	3	1	0	1	16
	56	10	0	0	2	1	7	3	3	0	0	0	13
夫婦＋後継者	52	3	0	0	3	0	0	4	0	4	1	0	8
	56	3	0	0	0	1	2	2	0	2	1	1	7
夫婦＋老人	52	3	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	3
	56	4	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	4
夫婦＋幼児	52	3	1	2	0	0	0	2	1	1	0	0	5
	56	2	1	0	1	0	0	4	1	3	0	0	6
夫婦のみ	52	2	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3
	56	1	0	1	0	0	0	1	0	1	0	1	3

では0.70人減少して1.80人となり，女性も0.73人減少して1.60人となっている。52年の６戸は基幹労働力に恵まれて多頭飼育を達成していたが，56年に新たに加わった４戸の労働力構成が若干劣っていたためにかかる減少をみせたものである。また，60才以上の男性が0.30人増加して0.80人になり，女性も56年になって新たに0.50人となり，最も高齢化の進んだ階層となっている。

酪農協業経営では，つばぬき協業の世帯員が0.66人減少して3.51人となり，５～９頭規模層に次ぐ少ない構成を示している。つばぬき協業の農家は多頭飼育に必要な労働力の不足を協業経営で充足してきたが，依然として世帯員構成に問題を残している。

更に，酪農農家についてその家族構成を夫婦を単位とする世帯構成でみると第２表に示す構成となる。

個別経営農家では，52年と同様に２夫婦構成が半数を占め，後継者が酪農に従事している農家も85％を占めている。これを飼養規模別にみると，小規模飼養農家は依然として夫婦中心の構成にあって零細経営を余儀なくされている。15～19頭規模農家３戸のうち１戸は後継者の結婚により２夫婦に充実し，２夫婦構成が２戸となった。20～29頭規模農家では，５戸のうち１戸が夫婦＋老人（片親）構成から後継者の成長により夫婦＋後継者構成となった反面，２戸が２夫婦及び夫婦＋後継者構成から夫婦＋老人構成になるなど前述の世帯員構成と同様に世帯構成の後退がみられる。30頭以上の大規模農家では52年の２夫婦農家５戸に２夫婦農家２戸と夫婦＋後継者農家２戸が加わって，多頭飼育を維持しうる良好な世帯構成にあるが，今後老夫婦の高齢化対策が必要となってくる。

協業経営のうち大三井協業は52年と同様の構成にあるが，２戸の農家で老夫婦が補助労働者に転じている。つばぬき協業では，６戸のうち１戸が２夫婦構成から夫婦＋幼児構成となり，夫婦＋後継者２戸が夫婦＋幼児及び夫婦のみの構成に後退するなどその世帯構成は更に悪化している。

養豚農家のうち１戸は52年の２夫婦構成から56年には老夫婦＋後継者構成に，１戸は52年の酪農経営（１～４頭規模）から転換した農家であり，世帯構成も夫婦＋幼児構成から夫婦のみ（経営主１人のみ）に後退している。

このように香取では，労働力構成の整った２夫婦構成農家が，52年の16戸（46％）から56年には13戸（39％）に減少して，夫婦＋老人または幼児の構成農家が増えるとともに，後継者を確保する農家も52年の27戸（77％）から56年には24戸（73％）に減少するなど夫婦を単位とする世帯構成の後退がみられた。

(4)　営農の概況

香取開拓農家は当初100戸の農家が自給自足農業をめざして入植し，栽培作物も陸稲，小麦，馬鈴しょ，豆類，そ菜などの自給用食用作物に加えて，甘しょ，里芋，大根などの換金作物を導入してきたものの冷害とやせ地のために営農不振に苦しんできたが，家畜飼養に活路を見出して主酪経営を導入し，更に酪農経営へ移行して現在に至っている。

この間に，畑地300ha，放牧採草地200haを造成してきたが，自給飼料生産強化のために49年度になって県営ほ

場整備事業を導入した。この事業は土地基盤整備225ha，道路延長15.6km，排水路延長16.4km，客土86haを9年間で完了し，58年度に換地を行う計画である。ちなみに58年5月県営ほ場整備事業の竣工式が挙行された。

更に，50年度には国営総合農地開発事業を導入，56年度までに95haの地区面積を開発して61.2haの耕地を造成しており，近く県開発公社との賃貸契約により各農家に配分する計画である。

このように，香取では飼料畑の開発・基盤整備が進行して大型機械による安定した自給飼料生産が可能となってきたが，一方では54年度から実施された牛乳の生産調整の影響が推察される56年の営農の進展を52年の調査結果と対比しながら検討してみたい。

第3表　主要作物作付面積　（1戸当たり，単位a）

年次	芋類	青刈麦類	青刈トウモロコシ	牧草類	根菜類	計
52	0.3	7	111	574	27	719
56	0	9	128	580	0	717

第4表　家畜飼養数　（1戸当たり，単位 頭，羽）

年次	乳用牛		肉用牛		豚	鶏
	搾乳	育成	肉用種	乳用種	繁殖用	成鶏
52	20.2	6.5	0.5	6.4	3.5	0.3
56	24.3	8.9	0.5	11.5	2.6	0.3

第5表　農家現金所得　（1戸当たり，単位 千円）

年次	畜産物				農外収入	合計
	生乳	乳用牛	肉用牛	肥育豚		
52	8,957	1,338	1,382	1,982	289	13,948
56	11,237	1,705	5,125	1,608	323	19,998

1）主要作物作付面積

香取では酪農経営の進展につれて飼料作物の作付面積が増大し，第3表に示したごとく，52年に飼料作物以外に芋類を0.3a栽培していたが，56年では全作付面積を飼料作物で占めるに至った。1戸当たりの作付面積は717a，このうち牧草類を580a（81%），青刈りトウモロコシ128a(18%)，えん麦，ライ麦などの青刈り用麦を9a作付している。

ところで，このような飼料作物の作付状況に対して香取農家の経営主は，8人（24%）が自家労働力で十分対処できるとしており，12人（36%）が適当な作付面積であると考え，11人（34%）が労働力が不足していると答えている。

また，現在の飼養規模と飼料畑の所有面積については，飼料畑が広くてまだ飼養する余裕があるとする経営主は6人（18%）で，11人（35%）が適当な面積を持っているとし，15人（46%）が少なくて耕地を更に必要とするとしている。

したがって，ほ場整備による換地や農地開発事業で造成される耕地の配分にあたっては，各農家の飼養規模や経営主の意向を検討し，あわせて飼料栽培の省力化をさらに推進していく必要がある。

2）家畜飼養

香取の家畜は労働力の充足，自給飼料生産体制の強化と相まって順調な伸びを示してきた。これを乳用牛についてみると，44年に1戸当たり10.2頭の飼養頭数から48年には17.5頭に，更に52年には20.2頭に増加してきた。続く4年後の56年には飼養体制も整備されて大幅な増加が期待されていたが，54年の牛乳生産調整に対処して飼養頭数を凍結したために24.3頭と3.1頭の伸びにとどまった。しかしながら，一方では40頭以上の大型酪農農家が52年の1戸から3戸となり，香取全体の搾乳牛が52年の708頭から56年には802頭に増え，育成牛を合せると乳用牛として1,000頭飼育を達成するに至った。

肉用牛は，52年7.9頭飼養していたが，56年には香取肥育センターが設置されて乳用種250頭規模の肥育を開始したため11.5頭と倍増している。

子取り用豚は大三井協業で養豚部門を廃止したために2.6頭に減少している。

香取では自家労働力で家畜飼養に従事しており，搾乳牛飼養規模と家族構成の関連については前項(3)で考察したが，ここで現有の家畜飼養数に対する自家労働力の充足度についての経営主の意識をみると，自家労働力は十分であるとする経営主は11人（33%）であり，14人（43%）は労働力が適当であると考え，不足しているとする経営主は3人（9%）であった。この意識調査で指摘されるように，香取では家畜飼養数と自家労働力の均衡がほぼ保たれており，今後生産調整が解除されれば飼養規模の拡大が期待されるところである。

3）農家現金所得

香取農家の農家所得の推移を現金粗収入でみると，第1回調査の32年には総額15.7万円で，その内訳は畜産物収入49%，農林産物収入27%，農外収入24%の比率にあ

ったが，その後酪農経営の進展とともに畜産物収入の比率が増大し，48年では総額488万円の93.7%，52年では総額1,395万円の97.9%を占めた。56年では総額2,000万円に達し，43.4%の伸びを示した。畜産物収入は，1,968万円で総額の98.4%を占め，その内訳は生乳が1,124万円で57%，肉用牛513万円で26%（うち乳用種が497万円），乳用牛の子牛，廃牛販売収入が171万円で9%，肥育豚161万円で8%の比率となっている。また，畜産物収入の52年から56年にかけての伸び率をみると，総額では605万円増で44.0%の伸び率をみせた。その内訳は肉用牛が374万円で270.8%増，生乳が228万円で25.5%増，乳用牛が37万円で21.5%増となるが，肥育豚は37万円減で18.9%の減少率を示している。

農外収入は若干の農家で，会社，農協勤務者の俸給や賃金収入があり，平均32万円である。なお，協業経営従事者は月給として大三井男性9.5万円，女性8.5万円，つばぬき男性11万円，女性8.3万円の収入があるが，これらは両協業の生産物収入と重複するため除外した。

このように，香取開拓地は農家所得の大半を畜産物収入に依存しているが，この農業所得に対して，十分な所得であるとする経営主はなく，4人（12%）が大体この程度だと思っており，26人（79%）が不十分な所得であるとし，特に意識していない1人（3%）であった。そして，農業所得を高めるための方策として，単位当たりの生産量の増加や品質の向上に重点をおくべきだとする経営主が17人（52%）あり，8人（24%）が経営の集約化を計るべきだとし，耕地や家畜の経営規模の拡大を6人（18%），経営の省力化を3人（9%）が指摘している。このように，香取農家の大半は農業所得が少ないと考え，農業経営の量的拡大よりも質的向上により所得を高めていきたいとしている。

2．生活時間構造

香取開拓農民は数回に及ぶ営農転換に対応して畑作労働から酪農労働へと労働様式を変え，それに規制された生活行動を展開してきた。

香取の酪農は山間草地酪農経営のため，室内酪農労働に飼料作労働が加わった長時間労働に従事し，しかも，勤労行動と消費行動が日常生活のなかで混在している。しかし，40年代になって協業経営の2法人が設立され，協業従事者は従来の慣習的な酪農労働から地区内通勤酪農労働に従事することとなり，特に女性従事者の労働内容が大きく変ってきた。[6]

ここでは，52年から56年にかけて生活時間構成の変化を検討してみたい。なお，56年の調査対象は個別酪農従事者男性31人，女性26人，協業経営従事者男性12人，女性11人，内用牛育成従事者男性なし，女性2人，養豚従事者男性3人，女性2人，総計男性46人，女性41人であり，52年の対象は男性48人，女性38人である。

(1) 生活時間構造

対象農業従事者の生活時間構造の推移を年次別，経営規模別に第6表に示した。

第6表　生活時間構造の推移　（1人1日当たり）

性別	年度	区分	単位	勤労	生理 睡眠	生理 その他	家事	社会文化
男	52	全農家	分	625	452	211	8	144
			%	43.4	31.4	14.6	0.6	10.0
	56	全農家	分	645	443	225	3	124
			%	44.8	30.8	15.6	0.2	8.6
性	56	酪農個別	分	647	433	228	3	129
			%	44.9	30.1	15.8	0.2	9.0
		酪農協業	分	643	468	199	5	125
			%	44.7	32.5	13.8	0.3	8.7
		肥育養豚	分	637	450	293	0	60
			%	44.2	31.3	20.3	0	4.2
女	52	全農家	分	485	433	194	184	144
			%	33.7	30.1	13.4	12.8	10.0
	56	全農家	分	466	416	201	238	119
			%	32.4	28.9	13.9	16.5	8.3
性	56	酪農個別	分	487	405	203	232	113
			%	33.8	28.1	14.1	16.1	7.9
		酪農協業	分	407	422	199	277	135
			%	28.3	29.3	13.8	19.2	9.4
		肥育養豚	分	493	473	195	167	112
			%	34.2	32.9	13.5	11.6	7.8

56年の調査期間中，第2日に香取入植35周年記念「香取100年シンポジウム」が終日開催され，第3日は雨天であった。52年にも雨天日があったので，表中の数値は晴天日の生活時間値を示した。

男性の勤労生活時間は48年の579分を最小として以後漸増傾向をみせ，56年には645分となり，そのしわよせが社会的文化的生活時間の短縮となっている。組織別にみると，勤労生活時間は640分前後で組織間に差は余りないが，睡眠時間は協業経営従事者が468分で個別酪農従事者より35分多く，この差が食事，休息などその他の生理的生活時間に現れている。これは，協業経営従事者が就業規程により勤務拘束時間や休息時間が定められているのに

対し，個別酪農従事者は随時休息できることに起因していると思われる。

女性の勤労生活時間は男性とは逆に48年の512分を最高として漸減傾向をみせ，56年には466分となったが，一方では家事的生活時間が増加しているため，両者を加えた総労働時間は52年の669分から56年には704分に増加している。この労働時間は男性の総労働時間を1時間も上回り，女性の時間的な労働負担は依然として解消されていない現状にある。組織別にみると，個別酪農従事者の勤労生活時間は487分で協業経営従事者より80分も多く，総労働時間も719分と最も多くなっている。家事的生活時間は協業経営従事者が277分で，肥育・養豚従事者との差は110分にも及んでいる。睡眠時間は肥育・養豚従事者が最も多く473分と8時間睡眠をとり，個別酪農従事者は1時間も少ない睡眠時間となっている。

なお，睡眠時間に関連して起床，就寝時間及び朝仕事の時間をみると，男性は平均して5時40分起床，22時19分就寝，朝食前の朝仕事に1時間55分就労している。個別酪農従事者は5時36分起床，就寝は22時27分で，朝仕事は2時間31分に対して，協業経営従事者は5時53分と起床時間がおそく，就寝も22時7分と早く床につき，朝仕事は26分である。女性は平均して5時27分起床で男性より早く起き，22時26分就寝で男性より少しおそく，朝仕事に1時間20分従事している。個別酪農従事者は5時29分に起床，朝仕事に1時間20分従事し，22時32分とおそく就寝するのに対して，協業経営従事者は5時21分に起床し，朝仕事は25分，22時21分とやや早く就寝している。

このように，生活時間構造は酪農経営の進展に応じて変動し，当初の飼養規模拡大期には酪農労働に多くの時間を費してその外の生活時間が圧迫されていたが，酪農労働の機械化，省力化が進むにつれて女性の勤労負担は軽減されてきたのに対して，男性は経営規模の拡大により依然長時間労働に従事していることが伺われる。

(2)　勤労生活時間

香取農民の勤労生活時間を作業別に第7表に示した。

男性の勤労生活時間は645分で，52年に比べて20分増加している。室内作業は322分で52年と差がなく，搾乳，給じ，掃除作業の所要時間はほぼ固定してきたとみてよい。室外作業は飼料畑作業や飼料収穫作業など飼料作労働に多くの時間をかけている。組織別にみると，個別酪農従事者の室内作業が協業経営従事者より97分多く，搾乳，給じ作業により多くの時間をかけている。協業経営では全員で搾乳作業を行い，給じ作業は女性と共同で行って

第7表　勤労生活時間構造の推移　　（1人1日当たり，単位 分）

性別	年次	区分	単位	合計	室内作業 小計	搾乳	給じ	掃除	その他	室外作業 小計	飼料収穫	サイロ詰	畑作業	堆肥運搬	その他	業務会合通勤
男性	52	全農家	分	625	331	136	82	91	22	271	63	69	39	45	55	23
			%	100	53.0	21.8	13.1	14.6	3.5	43.3	10.1	11.0	6.2	7.2	8.8	3.7
	56	全農家	分	645	322	131	84	79	28	280	69	43	100	45	23	43
			%	100	49.9	20.3	13.0	12.3	4.3	43.4	10.7	6.7	15.5	7.0	3.5	6.7
	56	酪農個別	分	647	350	148	98	76	28	297	70	64	88	46	29	0
			%	100	54.1	22.9	15.1	11.8	4.3	45.9	10.8	9.9	13.6	7.1	4.5	0
		酪農協業	分	643	237	122	41	63	11	241	52	0	144	45	0	165
			%	100	36.9	19.0	6.4	9.8	1.7	37.5	8.1	0	22.4	7.0	0	25.6
女性	52	全農家	分	485	298	102	86	99	11	186	35	55	62	18	16	1
			%	100	61.4	21.0	17.7	20.4	2.3	38.4	7.2	11.4	12.8	3.7	3.3	0.2
	56	全農家	分	466	283	70	94	90	29	183	30	37	70	38	8	0
			%	100	60.7	15.0	20.2	19.3	6.2	39.3	6.5	7.9	15.0	8.2	1.7	0
	56	酪農個別	分	487	309	111	70	81	47	178	29	53	52	40	4	0
			%	100	63.4	22.8	14.4	16.6	9.6	36.6	6.0	10.9	10.7	8.2	0.8	0
		酪農協業	分	407	212	0	121	91	0	195	45	10	87	33	20	0
			%	100	52.1	0	29.7	22.4	0	47.9	11.0	2.5	21.4	8.1	4.9	0

いるため所要時間が少なくなっている。室外作業では飼料畑作業が144分と多く，これは56年の調査時に飼料畑作業を重点的に行っていたために多くなっている。

女性の勤労生活時間は466分で，52年に比べて19分減少している。室内作業は283分で60.7%となり男性よりも高い比率を示している。搾乳作業は70分で52年より32分減少しているが，給じ作業，掃除作業の変動は少なく10分前後である。組織別にみると，個別酪農従事者の勤労時間は487分で協業経営従事者より80分多い。室内作業のうち搾乳作業は男性と共同で111分従事している。協業経営では搾乳作業は男性の担当，給じ・掃除作業は女性の担当と作業を分担しており，担当作業に212分就労している。

ここで，前述の生活時間構造にある香取男性50人，女性40人の勤労意識をみると次のごとくである。まず，毎日の農作業時間の長さについて，男性は長いとするもの13人（26%），普通とするもの31人（62%），短いとするもの5人（10%）であり，女性は長い10人（25%），普通26人（65%），短い1人（2.5%）と評価している。

また，農作業のつらさについて，男性は4人（8%）がつらい，37人（74%）が普通，9人（18%）がつらくないとし，女性は8人（20%）がつらい，27人（67.5%）が普通，5人（12.5%）がつらくないと意識している。農作業時間の長さの評価とつらさの意識をクロス分析すると，農作業時間が長いとする男性13人のうち3人（23%）は農作業がつらいとし，普通とするもの7人（54%）で，3人（23%）がつらくないと意識している。女性では長いとする10人の意識はつらい4人(40%)，普通5人（50%），つらくない1人（10%）となっている。

更に，現在の農作業時間の増減希望をみると，男性は減らしたいとするもの25人(50%)，現状でよいとするもの20人(40%)，増したいとするもの5人(10%)であり，女性は13人（38.5%）が減らしたいとし，25人（62.5%）が現状でよいとし，2人（5%）が増したいと考えている。農作業時間の長さの評価と増減希望をクロス分析すると，農作業時間が長いと評価している男性13人のうち11人（85%），女性10人のうち6人（60%）が農作業時間を減らしたいと希望し，農作業時間は普通であると評価している男性31人のうち13人(42%)，女性26人のうち6人（23%）が農作業時間を減らしたいと考えている。

したがって，当然のことながら，農作業時間が長いと評価している農作業従事者は農作業がつらいと意識し，より多くの従事者が農作業時間を減らしたいと希望しているから，今後，労働意欲の向上と労働条件の改善が要望される。

3．食生活構造

香取開拓農家は畑作経営から主酪経営を経て酪農経営へと転換してきたが，その転換時には一時的な生活面の停滞をみたものの，経営の進展に伴って生活面も着実に向上をみせてきた。[4,5] ここでは，酪農経営の基礎作りを終えて規模拡大が進展しつつある52年から56年にかけての食生活についてみたい。なお，56年の献立分析は回収調査票のうち集計可能な26について集計，52年は27について集計した。意識分析は非農家を含む38戸の調理担当者について集計した。

第8表　栄養素摂取量の推移　（1人1日当たり）

栄養素		52年	56年	60年推計栄養所要量
エネルギー	kcal	2120	2337	2000
蛋白質計	g	73.5	90.0	65
うち動物性	g	32.6	43.9	—
脂質	g	44.4	66.8	—
カルシウム	mg	551	693	700
ビタミンA	I.U.	1416	2748	1800
ビタミンB_1	mg	1.29	2.33	0.8
ビタミンB_2	mg	0.94	2.29	1.1
ビタミンC	mg	100	128	50

第9表　食品摂取量の推移　（1人1日当たり，単位g）

食品群名	52年	56年	55年度国民栄養調査農家世帯
穀類	418	387	338
いも類	42	89	72
緑黄色野菜	80	96	52
その他の野菜	246	340	223
果実類	134	125	145
豆類	67	69	75
魚介類	62	75	97
卵類	39	33	33
乳類	140	205	88
肉類	57	67	54

56年における香取農家の平均1人1日当たり栄養摂取量は第8表のとおりである。52年の摂取量と比較した場合各栄養素とも増加をみせ，特にビタミン類，脂肪が著しい。これらの栄養摂取量を昭和60年推計の栄養所要量と比較すると，Caがやや下回る程度で他の栄養素はいず

れも所要量を上回っている。

次に，56年の１人１日当たり食品群別摂取量を第９表に示した。

52年に比べていも類が倍増し，乳類，緑黄色野菜，その他の野菜，魚介類，肉類が大巾に増加し，卵類，果実類が減少を示した。これらの食品群別摂取量を昭和55年度国民栄養調査農家世帯の平均値と比較すると，乳類が2.5倍の摂取状況を示し，果実類，豆類，魚介類のほかはいずれも全国平均値を上回っている。

一方，これら食品材料の調理形態は，汁物が多く１戸１日当たり1.42の品数となり，煮物1.04品，和え物0.93品，焼物0.81品，油いため0.68品，揚げ物0.48品，生食１.26品となっている。また，手作りそう菜の品数は１戸１日当たり7.24品で，このうち伝統的な手法で調理した和風そう菜は4.37品，中華風，洋風などの折衷風そう菜は2.87品となり，折衷比率は39.6％である。

ここで，調理担当者38人の食生活に対する意識をみると，27人（76％）の担当者が栄養のバランスを考え家族の健康を維持していくものと考え，６人（16％）が家族の団らんの場とし，５人（13％）が栄養をどうこう言うよりも好きなものを食べて満足するものと考えている（複数回答を含む）。また，献立を考える時に重視する事項として，栄養のバランス21人（58％），家族の好み８人（21％），経済性６人（16％），家族の健康６人（16％）を指摘している。そして，現在の食生活について，満足している８人（21％），大体満足している21人（55％），やや不満である７人（19％），（無回答２人）とし，やや不満であるとする７人は不満理由として，６人がもっと料理に時間をかけたいが時間がとれないことを指摘し，１人が近くに店がないために材料の購入や献立が自分の思うとおりにならないとしている。

このように，香取農家の食生活は栄養摂取状況も良好で，牛乳の摂取量も極めて多く，酪農農家にふさわしい食生活にあり，調理担当者は現状に満足しているもののもっと調理に時間をかけてそう菜を作りたいとしている。

総　　括

香取開拓農家は40年代に酪農経営の基盤作りを終え，54年の牛乳生産調整の実施にもかかわらず経営規模を拡大し，生活を充実させている。しかし，今なお営農不振にあえぎ生活に苦しんでいる小規模農家があり，開拓一世の高齢化による労働力の質的低下がみられること，また，香取として酪農に依存した単純生産構造をいかに複合していくかなど今後の発展が期待されるところである。

本調査にあたり協力いただいた香取開拓農協の役職員をはじめ農家の方々に厚く感謝する。また，現地調査と集計を担当した56年度農業労働科学研究室専攻生の池田直明，沖田真司，金田和弘，代田博文，寺井千景，布目清秀，山根辰己の各氏に謝意を表する。

文　　献

1）宇野文男・福士俊一・田中　浩・他５名：鳥取県香取開拓地に於ける営農展開．農村生活研究，２，(1) ８～11　(1958)

2）福士俊一・藤田光男・田中　浩・坂尾嘉彦：営農改善に伴う農家生活の変動―鳥取県香取開拓農家の事例について―．農業及び園芸，37　1969～1971　(1962)

3）福士俊一・田中　浩・他４名：鳥取県香取開拓地に於ける営農展開（第２報）．農村生活研究，６　(2) 37～43　(1962)

4）福士俊一・田中　浩・藤井嘉儀：香取開拓地における主酪経営の確立過程．農業及び園芸，41　867～870　(1966)

5）福士俊一・田中　浩・藤井嘉儀：鳥取県香取農家の経営と生活．鳥大農研報，29　74～79　(1977)

6）田中　浩・福士俊一・倉田悦美：鳥取県香取農家の生活時間構造．鳥大農研報，31　268～275　(1979)